

聴覚障害と知的障害がある生徒における携帯メールの使用

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター

「脱施設」が進行するにつれ、障害がある個人を対象にした地域生活スキル獲得についての実践的研究が行われるようになった。その中で電話使用についての研究も行われるようになったが、初期の研究では電話のコミュニケーションとしての「機能」が取り扱われることはなく、もっぱらダイヤル式の電話機の機械としての「操作」についての訓練が行われた。80年代になって、電話の「機能」を重視した研究が行われるようになり、火事や事故などに遭遇した時の緊急連絡手段としての使用や、会話などの日常的コミュニケーション、移動の安全を確保するための居場所の報告といったことが検討されてきた。

これまでの電話の研究においては、すべて卓上電話や公衆電話といった固定電話を使用したものであり、通話する2者が両方とも固定電話の前にいるときでしかコミュニケーションが成立しなかった。一方、近年急速に携帯電話が普及している。携帯電話を使用すると、一方または両方が移動中であっても必要な時にその場で通信の手段として使用できるというメリットがある。音声を使用できない聴覚障害と知的障害がある人が使用する場合を考えたとき、「文字モード」である携帯メールというを使用することによって、とりわけ遠隔地間のコミュニケーションが実現される。また、メールの文章をストックできる携帯メールの特徴から、使用者の都合に合わせてメールを見ることができ、特に知的障害がある人の使用を考えたとき、即時的に反応しなければならない音声を使用した電話に比べて操作という面でも使用しやすいというメリットもある。

以上のことをふまえ、本研究では聴覚障害と知的障害がある生徒を対象に携帯メール使用スキルの獲得を検討することを目的とした。具体的には2つの場面が設定された。まず訓練対象者出かかっている時に物品を買ってくるよう依頼されると、その物品を購入して依頼した人に渡すという「要求充足」、訓練対象者が鉄道駅にいる時に「どこにいますか」というメールを受信すると、自分が今いる駅の名前を返信する「駅名報告」という2つの場面が設定された。

要求充足行動の獲得については、U君を対象にした事例1と、K君を対象にした事例2が行われた。基本的に訓練対象者には「(物品名)ください」というメールが送信され、依頼された物品を依頼された人に供給することが求められた。ともに訓練室場面でのシミュレーション訓練と、コンビニなど実際の店舗における買い物テストが組み合わせて行われた。事例1では、シミュレーション訓練でU君の行動の水準が達成基準に達した後、買い物テストが行われ、携帯メールで依頼された物品を依頼した人に手渡す行動が生じたことが確認された。事例2では、「ください」というメールに加えて「いいりません」というメールも混合して送信し、メールの内容が弁別刺激となるかどうか検討された。その結果、メールの内容に応じた要求充足行動が獲得され、般化・維持も確認された。

駅名報告行動の獲得については、U君を対象としてセッションが行われ、訓練対象者には、基本的に、鉄道駅にいるときに「どこにいますか」というメールが母親から送信されると、「にいます」と携帯メールで報告することが求められた。セッションでは、U君が通学で使用する駅で駅名報告を行った「訓練1」、U君が未知である駅で駅名報告のテストをした「未知駅プロブ」、行動ステップに「駅名看板を探す」という項目を新たに加えた「訓練2」の3種類が行われ、U君が通学で頻繁に使用する駅だけでなく、初めて行く駅でも駅名報告が可能となるように訓練が進められた。その結果、通学に使用する駅だけでなく初めて行った駅でも、「駅名看板」を手がかりにして携帯メールによる駅名報告をすることが可能となった。

以上のことから、いずれの場合も、携帯メールを使用して目標とされた行動が獲されたと言える。携帯メールによる要求充足行動を活用して「おつかい」が可能となったり、駅名報告行動によって一人通学が可能になったりしたことから、携帯メールの使用という新しい地域生活スキルを獲得することによって、生活空間の拡大の可能性を示せたと言える。また、携帯メールという「文字モード」のコミュニケーション手段によって、移動しながらのコミュニケーションである要求充足と駅名報告が可能となったことから、聴覚障害と知的障害がある個人のコミュニケーション手段としても、携帯メールが有効であることが示された。一方で、全課題提示法による訓練を行うときのベースラインの取り扱いや、携帯メールのセッションを行うときの信頼性の計測方法といった、訓練デザイン・手続き上の問題点も浮き彫りにされた。

今後の課題としては、・複数の「機能」(要求充足や駅名報告など)のメールの弁別を検討すること、・情報ををストックすることができるという携帯メールの性質を活かした活用方法を検討すること、・携帯メールについての情報を、使用する本人や周囲の人に提供していくこと、・携帯メールの言語行動としての分析を行うこと、という4点が考えられた。これらを解決する中で、障害がある個人が携帯メールを使用する場合の用途やセッティングをどう設定するかを検討していく必要があると考えられる。

キーワード：ろう重複、地域生活スキル、携帯メール、要求充足行動、駅名報告行動、全課題提示法、信頼性、言語行動